

スクールデイズ 二次創作

星に見守られ舞う二人

有栖山 葡萄



有栖山書房

## 目次

◎ 前回までのあらすじ—— 06

第一章 ◎ やわらかな屋上—— 07

第二章 ◎ 日常は巽に満ち—— 21

第三章 ◎ 言葉がんばる—— 26

第四章 ◎ すれ違う想い—— 28

第五章 ◎ 想い放たれ—— 32

第六章ノ壱 ◎ 緋く照らされ舞う二人—— 36

第六章ノ弐 ◎ 星に見守られ舞う二人—— 42

余文 ◎ 或いは食道楽の日々—— 48

あとがき ◎ 夜空に星が……—— 49

二人の少女と一人の少年が過ごす学園生活。何処にでもある光景、ごくありふれた日常。だけどそんな生活にも、転機は訪れる。

彼は気がついた。

「今が、選択の、瞬間だ。」

かがり火に緋く照らされ、二人が手を取り合う  
夜空に瞬く星に見守られ、二人が手を取り合う

彼の選択は、関わる人を違った未来へと導く。

ただ変わらないのは、一人の少女の想い。

そんな恋の物語。

### 前回までのあらすじ

榊野学園さかきのがくえんにこの春入学した少年——伊藤誠いとうまことは、通学途中の列車で見かける少女に想いを馳せていた。彼女はいつも電車の中で静かに本を読み、その容姿と相俟って上品な雰囲気をもとっていた。

夏休みが明け、久々の登校。二学期の始まり。

休み前と変わらず、ホームには彼女がいた。誠は思い切って携帯で彼女を撮る。その写真を携帯の待ち受け画面にする為に。

「好きな人の写真を待ち受けにして3週間、  
誰にもバレなかったら恋が成就する」

榊野学園で流行っていた、そんなお呪い。

しかし彼は、三週間隠し通す事が出来なかった。なんとも間抜けな話で、初日に見つかってしまったのだ。

写真に気付いたのは、同じクラスの西園寺世界さいおんじせかい。

入学して誠と同じクラスになってから、彼女は密かに彼に憧れを抱いていた。

新学期の席替えで、親友の清浦刹那きょうらせつなから誠の隣の席を無理やり譲り受ける。そして彼に話し掛けようと近づいた所、誠の携帯の待ち受けを目にしてしまった。黙っておけばいいものを、世界は誠に「それ、例のお呪い？ 伊藤って、4組の桂さんの事が好きなんだ」と核心をつく。否定する誠だが、世界は話を勝手に進め、お呪いのお詫びとしてある提案をしてくる。

「伊藤と桂さんの仲、私が取り持っあげる」

その日を境に世界と誠、そして彼の想い人——桂言葉かつら、三人の関係が動き出す。

思いがけずとんとん拍子に話は流れ、誠と言葉の二人は付き合うこととなったが……

## 第一章 やわらかな屋上

榊野学園さかきのがくえん、校舎屋上。

本来は施設され一般の生徒たちが上がってくることはない場所なのに、なぜかベンチなどが置かれていたりする。午前の授業が終り昼休みとなり、そのベンチに二人の少女が、丁度あと一人が座れるくらいの距離を空けて座っている。

少女の片割れ——西園寺世界さいおんじせかいが、天文部を復活させ持ち出していた鍵を利用して、昼休みを過ごすようになって数週間が過ぎていた。ちょっとした日常的な雑談をした後、二人の間に会話は無くなり、各々ぼんやりと空を眺めたりしていた。

二人の隙間、そこに座る彼を待つ。  
「誠、遅いねえ。もうお腹ペコペコだよ。ねえ桂さん、先に食べようよ」

世界はぐੱつたりとした顔を、少し離れて座る少女——桂言葉かつらにむける。

「だめですよ、西園寺さん。誠くんが可愛そうです」

そういつて言葉は、自分の膝の上に置いているランチボックスを支える手に入れた。

「うう、誠だったらなにやってるんだろ」

世界は身体をだらしなく、ベンチの背もたれに預ける。

「西園寺さん、同じクラスですよね。誠くんにかいってませんでしたか？」

「それがさ『ちよつと遅れるから、先に行つといてくれ』ってだけで、詳しい理由は何も聞いてないのよね」

うだーとした姿勢のまま、世界は眉を寄せ首をかしげる。「誠くんにもなにか都合があるんですよ。ちよつとつていうくらいですから、そんなに時間かからないかと思うんです。もう少し待ちましょう」

言葉が世界を論して、彼を待とうと言い募る。彼女としては自分が彼のために作ってきたお弁当を先に食べてしまう事に気が引けているのだ。

「そうね、せつかくだしね」

そう言いつつ世界は、傍らに置いた袋から紙パックのジュースを取り出しストローを刺すと、ちゅーつと吸い始めた。

「はあ、授業で妙に緊張してたせいか喉渇いちゃって」  
世界は一息ついたという風にベンチにゆっくりともたれかかると、そのまま背を反らし空を仰ぎ見た。

頭上に広がるのは、透感のある青い空と秋の装いを持ち始めたいわし雲だった。時折肌を撫でていく風もすでに夏のものではなく、少し乾いた涼しげなものになっていた。

「いい天気よねえ」

呟くように世界が感想を漏らすと「そうですね」と言葉も短く返す。

近頃この屋上で一緒に食事をしているとはいえ、もともと口数の少ない言葉から会話を振るということはあまり無い。大抵の場合は、世界が誠をからかいながら、なにか話のネタを振って会話を盛り上げているのが常だった。

「ねえ、桂さん」

世界はお腹に力を入れ勢いをつけて身体を起こすと、言葉に視線を向ける。言葉は世界を見ると「はい？」と小首をかしげる。なんだろうと不思議な顔で見返す言葉に、世界は続けた。

「もうすぐ学祭だけ……後夜祭のフォークダンス、誰か誘わないの？」

世界の質問は唐突だった。暦は十月に近づき、確かにそろそろ学祭のシーズンではあったが。言葉自身も、クラス委員で学祭の実行委員として打ち合わせに出いたので、そのあたりは判っているつもりだった。しかし世界の質問は、唐突で意味のわからないものだった。

「え？」

脈絡の無い突然の質問に、言葉は意味のある返事を返せなかった。そして、フォークダンス・誘うという単語を頭で整理しながら、世界の言おうとしていたことを頭の中で整理していく。

「といっても、桂さんは誠一筋だから、誰か誘うといっても誠以外ありえないか」

ひとりしたり顔で頷きながら、世界は言葉を見る。

「ええ!? どうしてそうなるんですか」

言葉は戸惑いから一転、今度は驚く番だった。

ようやく頭の中で整理して話の流れが判りかけたところで、今度は大好きな彼の名前がいきなり出てきたのだから仕方が無い。「だって、そういう意味だよな」と、驚く頭の中で自分に問いかける。

「だって後夜祭のフォークダンスだよ。思い出作りだよっ」

世界は力説する。

「だけど、そんな、誠くんの迷惑になるかもしれないですし」そんなふうに思ってしまう言葉の引つ込み思案な性格が、世界の意見に賛同しようという気にさせない。

「それを迷惑に思うような奴じゃないでしょ、誠は」

「そうでしょうか？」

「そうだって。ダメだよ、そんなことじゃ。もっと誠に積極的にアピールしなきゃ」

世界が言葉を煽る。

「ですけど……」

相変わらず渋る言葉に、にこりと笑いかけると世界は話の方向を変えた。

「それに桂さん。榊野学園学祭の伝説って、しってる？」

「なんですか、それ？」

話が飛んだ。そんな気がしながら、言葉はおとなしく世界の話聞くとうと耳を傾ける。

「まず学祭と一緒に回ろうって誘うのは、告白と同じ意味なんだった。それで、後夜祭のフォークダンスと一緒に踊ったカップルは、その年一年は仲が続くって言う伝説。なんかその年限定ってところが、妙に現実的で生臭いけど。その分、信憑性が高いと思わない？」

一気にまくし立てる世界の話を、言葉は首をかしげながらきいていた。

「私、そんな話聞いたことありませんよ」

彼女は率直な感想を漏らす。そもそもそんな伝説、どこで流れているのだろうか。

「そっか、結構有名な話らしいんだけど。あとひとつの学祭の伝説も含めて」

「あとひとつ？ なんですか？」

ふふふっと妙な含み笑いをしながら、世界は言葉を見る。

「まあ、もうひとつの伝説って言うか、女子に伝わる伝統は桂さんにはちよつと言いくい話なんだけど、フォークダンスの話は有名ならしいわよ」

質問は巧くはぐらかされた感じがあるし、どうにも要領を得ない話だった。

「らしいって……」

「まあ私も友達に聞いただけだしね。女バスの子で、そういう話を先輩から聞いたって。私は帰宅部だし、どうしてもそういう話は伝聞形になっちゃうのよね」

あいまいな笑顔の後、世界はまっすぐに桂を見ると、微笑みかけた。

「まあ。やつぱり、こういうイベントは最大限に利用しないといけないってことよ」

訳の判らない確信を持って勢い良く、世界は力強く頷きながら断定してくる。言葉としてもあまりの力強さに、本当にそんなのかなという気になってしまっている。

「そういうものですか」

「そういうものです。あつたりまえじゃない。結局、相手の男に逃げ道をなくすようなものなのよ、きつと」

「それって……」

「いいのよ。それに誠つてばはつきりしないから、桂さんのこと好きだって言つてて、いまだにうじうじしてるところあるみたいだし。ここでガツンと意思表示したほうがいいのよ」

世界はこぶしを握り締め、目の前にいる想像の誠に右フックを食らわされていた。

「それっていいんでしょうか。なんだか誠くんに悪いような気がするんですけど」

言葉は困惑した顔で、世界を見ている。

「いいの。誠のことは二の次にしておいて。今は桂さんがしつかりと誠のことを捕まえられるかが重要なんだから」

世界は、自分の意見に酔っているように話を続けた。

「大体誠って、鈍感だし優柔不断だし、それに浮気性っぽい」  
散々な世界の台詞に、言葉はちょっとムツとしながら否定しようとしたが「うう」というなんとも締まらない言葉で返事をすることしか出来なかった。

彼女自身すっかりと意思を伝えるのは苦手な性分だし、誠のことも完全に恋人同士として付き合っていると言い切れない不安もある。それに以前誠が、他の女子と仲良く歩いているところを見たこともあるので、なんだかはつきりと言い切られてしまうとそんな気になってしまうのだ。

「そうでしょ？ だからここはしっかりとアピールしておいたほうがいいのよ。そのほうが二人のためになるんだって」

世界は必死にそういつて彼女を盛り立てると、その次の言葉を続けた。

「だからね。誠と踊るのよ」

「ですけど……」

煮え切らない言葉に、世界は苛立ちを隠しきれず、少し語気が荒くなっていく。

「そんなことじゃ、いつまで経っても曖昧なままで続くわよ」

「それは、よくない……ですけど。だけど急すぎるのもやっぱりちょっと」

世界は「はあ」一瞬小さくため息をつくど、とんでもない事を口にした。

「じゃあ、私と誠が付き合ってもいいの？」

突然のことに言葉は声すら出せず、あっけにとられぼかんと彼女を見返すしか出来なかった。

世界は言葉をじっと見詰める。

「仕方ないじゃない、私だって誠のことが好きなんだから」  
なんていうことを、いきなり世界は真剣に言い始めた。

「ええっ!!」

言葉は驚きの声を上げる。

それは当然だ。そんなことは、一度だって世界は声にしたことが無い。だけど素振りが全く無かったかといえば、確かに誠と世界の間には疑問に思う事が幾つかあった。

言葉は誠を信じていた、誠が好きだった。だから疑問は気のせいだと、考える事を拒絶していたのかもしれない。軽い眩暈と共に、言葉は得体の知れない感情の波が沸き起こった。

「西園寺さんは、私と誠くんのこと応援してくれるっていつたのに。うそ、だっただんですか」

言葉は世界を見返すと、上半身を詰め寄らせる。その表情は怒りに険しく歪んでいるというよりも、困惑や戸惑いの色が強かった。

「そんなの嫌です、私は誠くんのが好きなんです。誰かと付き合うなんて嫌です。それに西園寺さんは私に誠くんを紹介してくれて、私の応援をしてくれるって言ったのに、それが自分が誠くん付き合いたいなんていうのはおかしいです、間違ってます。そんなの通りません。絶対だめです」

言葉の勢いに世界はたじろぎあどすさった。言葉の表情は徐々に強張り、いつもの寡黙な彼女からは考えられないほど一気にまくし立てている。

「か、かつらさん？」

世界は、あまりのことにそれ以上静止の言葉が出てこなかった。彼女がこんなに激しく反論してくるとは思っても見なかったのだ。

なおも言葉の勢いはとまらず、身を詰め寄らせていく。

「私、そんなこと許しませんから。いくら西園寺さんだからって、譲れないです。今までのことは感謝していただきますけど、そんなこと全部帳消しです」

言葉がさらににじり寄ると、世界はあいまいな苦笑いを浮かべながら、両手で言葉を止めると「あはは」と誤魔化す。

「待って待って。桂さんったら、そんなに真剣にならならないですよ。私が誠と付き合うわけ無いじゃない」

必死に言い訳をはじめ。

「ほら誠って、本人が気がついて無いだけであれで結構もてるんだよ。だから、そういつて、誠に言い寄る娘が居ないとは限らないんだよ。だからね、不特定の誰、っていうよりも私のほうが桂さんがもっと本気になるかなって思ったのよ。ちょっと薬が効きすぎたわ、ごめんね」

表情は焦りと困惑を混ぜた曖昧な笑いで、世界は話を途中で遮られないようにと一気に言い切った。

「西園寺さん」

言葉は少し落ち着いたが、疑いの目を世界に向けている。

「桂さんが誠に対して本気だっただけでわかっているけど、あまり関係が進んでないことが、傍で見えてちょっとじれったく思ってたの」

話の方向を徐々にずらしに行く。

「それは……」

凶星を突かれた言葉の声は、尻すぼみになる。

「だからね、この機会に一気に距離を縮めて欲しいな、なんて思ってたのよ」

世界が言葉に向かって微笑みかける。心配性の姉が、臆病な妹を見守るような視線。

「そう、なんですか。ごめんなさい、私早とちりしてしまったみたいで」

言葉が頭を下げる。

「いいのいいの、頭なんて下げないで。私も、ちょっと意地悪かったから」

世界が頭をかきながら「あははっ」と軽く笑う。そして、笑顔の中に真剣さをこめて言葉に視線を向けた。

「で、さっきの話に戻るんだけど」

「えっと、なんの話でしたっけ」

二人の間に「……」と、背後にカラスが飛んでいくなんと形容しがたい微妙な空白が生まれる。

首をかき上げて「えっと？」という言葉に、世界は嘩然として間抜けに口を半開きになっている。

「桂さん、本気で言ってるの？」

「えっと、今のシヨックが大きくて、その前の話全部頭から飛んじやいました」

恥ずかしそうに言葉が答えると、世界がプツとふきだす。

「あははっ、そうか。シヨックが大きすぎちゃったのね。じゃあもう一回言うわね。後夜祭のフォークダンスのことだよ」

「あ。ああ、そうでしたね」

言われて思い出したと、言葉は手をポンツと打つ。

「そうそう。で、どうする？ もちろん、誠を誘うわよね」

「でも、やっぱり皆の前で踊るなんて恥ずかしいですし」

「まだそんな事言ってる。皆にお披露目するのが目的なんだから」

言葉は、それは納得したと小さく頷く。

「それは判ったんですけど……」

もじもじと徐々に声が小さくなっていく言葉に、世界は首を傾げる。

「けど？」

「えっと……」

歯切れの悪い言葉に、世界は無い頭を巡らす。

お披露目に一緒に踊るのは了解したけど、それ以外に問題がある。となると、理由は簡単だった。

「踊れ、無いとか？」

「えっ？ どうして判ったんですか？」

「いや、なんとなくなんだけど」

世界の考えは当りだった。もっとも普段の言葉を知っていれば、簡単に思いつくことだった。

「恥ずかしいんですけど。私体育の授業は知ってのとおり休みがちで、それに一緒に練習してくれる人も居ませんから」

言葉は寂しげな笑顔で、世界を見た。世界はちよつと思案する。

「そっかあ。じゃあ桂さん、練習用に曲のMD持ってきてあげようか。それでがんばって練習すればいいのよ」

「えっと、面倒じゃないですか？」

言葉は、世界に申し訳なさそうな顔をする。

「全然、それくらいなら簡単だって。で、練習をして、当日は誠を誘って踊るんだよ」

「はいっ、私、頑張って誠くんを誘ってみますっ」

言葉は両手を握ると胸の前でファイトツツって感じにポーズを決めると、満面の笑みを浮かべて気合を入れている。

「じゃ、決まりね。早いうちに、どこかで曲のMDもらってくるから」

「ごめんなさい、ご迷惑おかけします」

言葉がぺこりと頭を下げる。

「いいのいいの、気にしないで」

世界はあははと軽く笑いながら手を振る。そして、この話は此処で終わりとばかりに話題を変える。

「それにしても、誠遅いわね」

「そうですね」

先ほどから会話に何度も出ている、二人の間隙を埋めるはず

の少年は、いまだ屋上に現れていなかった。

「これじゃご飯食べる時間なくなっちゃうじゃない」

ふくれっ面で世界が、文句を言っている。

「予鈴までには、まだ十分時間ありますよ。でも誠くん、本当に遅いですね」

校内へと続く屋上から飛び出た階段室の扉に、二人が視線を

向けると同時にその扉が開かれた。

中から現れた少年——伊藤誠は、空からの日差しをまぶしそ

うに手でさえぎると、全く焦ることもなくゆっくりと歩いて二人の座るベンチへと近づいていった。

「ごめん、遅くなって」

謝ってるって感情がこもってないんじゃない？ と思わせる

ような抑揚の少ない声で、彼は二人に声をかけると、自分の位置となっている二人の少女の間に腰掛けた。

「ぶーぶー、誠、ほんとに遅いわよ。か弱い世界ちゃんは餓え死ぬかと思っちゃいました」

世界はほっぺたを膨らませながら、文字通りぶーぶーと文句を言っている。

「あはは」

そんな様子に、言葉は苦笑いをする。

「そんな体格のいい世界が、すぐに飢え死にするように見えるかよ」

誠が軽口をたたく。

「そういうのは、言葉みたいにか弱そうなスタイルで言っ始めてそれっぽいなだぞ。なんで、その意見は却下」

言葉は誠の言葉のどこかに反応したらしく、頬と耳を赤くして俯いている。

そんな様子を見て世界は何か思いついたのか、誠に反論しながらふざけ始めた。

「えー、ひどい。私のこと、デブだって誠が苛めるよ、桂さん

その大きな胸で慰めてえ」

そういうや世界は立ち上がり言葉に近づくと、抱きついて顔を彼女の胸にある大きな二つの膨らみに押し付けるとぐりぐりとすりついている。世界が頭を動かす度に、誠の目の前ではふ

によんふによんと言葉の胸の膨らみが形を変えていく。

「さ、西園寺さん、だめです、離れてくださいっ」

むによんふによん。

「そんなこといわないでえ。誠の言葉に傷ついた私は、この胸の膨らみを堪能しないと生きていけないのっ」

さらにエスカレートした世界は、両手でしっかりと言葉の胸をつかむと揉み始めた。